

## 「分析美学」

20世紀初頭にデュシャンが《泉》を発表して、すでに100年が経過した。現在では、コンセプチュアル・アート、メディア・アート、アース・ワーク、参加型アートなど多様な芸術が存在し、地域のアート・フェスティバルやまちづくりにおいてコミュニケーション・ツールとして芸術が盛んに利用されている。このような現状において改めて芸術の定義やその条件を問い、美的価値や感性の問題を議論することは、現実世界を対象として価値や倫理を問うてきた哲学研究において必要不可欠な課題である。

時代と共に変化し続ける芸術を扱う上で、哲学・美学の中で最も適切な学問の一つが分析美学であることは疑い得ない。1950年代以降、現代分析哲学における分析という手法と経験論とを基礎として展開された分析美学は、古典的な近代美学とは異なる仕方で、芸術へのアプローチを可能にする。分析美学においては、より良い芸術の定義や条件が見いだされ、常に更新作業が繰り返されている。例えば「芸術の定義」に関しては、芸術の定義不可能性を主張し、創造力をもつものとしての「芸術」という側面に注目するワイツの議論が挙げられる。ワイツの定義とは異なり、ダントーは「アート・ワールド」によってアートが決定されるとする見解を示す。このダントーの芸術の定義に対してアートの「制度論的定義」を主張するディッカーがいる。このような現在進行形の事象を扱い、芸術のよりよい定義を求めて議論することは、哲学の営みそのものである。分析美学の手法と研究状況を知ることが、現代の哲学研究者が哲学史と自身の研究を反省するのに役立つだろう。

加えて近年の我が国の研究状況を鑑みれば、2000年以降次々と分析美学関連の書籍（ステッカー『分析美学入門』、ダントーおよびディッカー他『分析美学基本論文集』、グッドマン『記号主義』と『世界制作の方法』、コースマイヤー『美学—ジェンダーの視点から』、ダントー『ありふれたものの変容：芸術の哲学』etc.）が翻訳された。このことによって、分析美学の研究が日本でも周知され、大きな進歩を遂げたと思われる。今回のテーマレクチャーでは、分析美学の最新の研究成果に触れる機会を提供したい。